No. 13

やまぐち自然派宣言

共生の思想を深める①

近況から思うこと

表彰受賞者（団体）活動紹介

水・土壌環境保全功労者表彰　白井　啓二

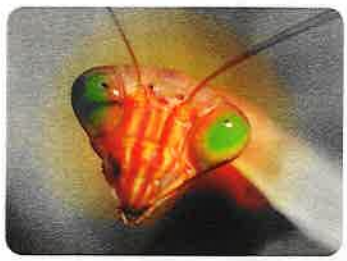
野生生物保護功労者表彰　笹尾　克之

環境学習功労者知事表彰　伊藤　忠雄　黒田　義則

日本ユネスコ協会プロジェクト未来遺産登録
　椹野川流域地域通貨・連携促進検討協議会

やまぐち県民活動パワーアップ賞
　ＮＰＯ法人ふるさと里山救援隊

山口きらめき財団理事長表彰
　山口カブトガニ研究懇話会



共生

共生随筆

天然記念物「向島小学校の寒桜」

秋吉台の草原維持

島田川のウラギクの保全活動

第10回リレーミーティング in 徳地

やまぐち自然共生ネットワーク

平成 26 年 2 月 28 日

共生の思想を深める　①

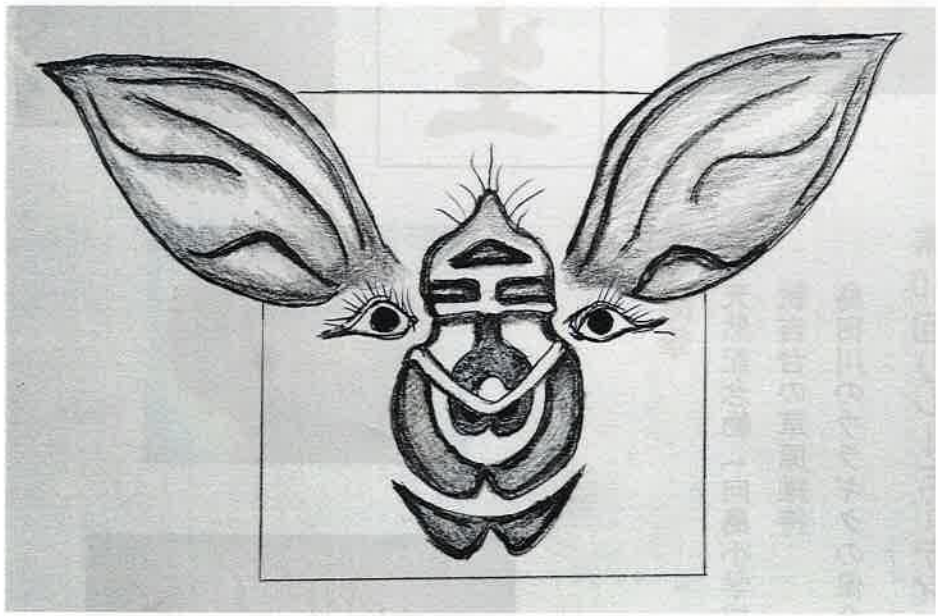
地球温暖化をめぐって

地球温暖化は人間活動に伴って大気中の温室効果ガスの増加により、地球の気温が平均的に上昇することをさす。

現代文明の置かれた状況を病気にたとえると、それは慢性の生活習慣病で、放っておくと、どんどんひどい症状が出る可能性がある。

江守正多、二〇一三「異常気象と人類の選択」（角川書店より）

地球温暖化は生物の生存や人類の問題に大きな影響を与え続けている。私たちは、今こそ人類の運命を左右する地球温暖化問題を議論し、正しい対策を取るようにしたい。



「人の目を入れたコウモリ」

近況から思うこと

開村修三

最近はとかく歩くことにしている。時には足に重りをつけて自分自身の脚力の増強を目指している。歳もとってくると脚力増大につながるかどうかは期待しすぎてもいけないが、今年の九月には視覚障害者の全国交流登山が、会津磐梯山・安達太良山で実施されるので、それに備えて頑張っているつもりである。

日頃は月一回(第二日曜日)周南市内の万葉の森を、視覚障害者の方々、がん患者の人々、統合失調症の方、視覚・ろうあの若い男性、ボランティアの人々が加わって、ちょっとした山を楽しくウォーキングしている。途中では木々の名前や、由来、草花、鳥の鳴き声から鳥達のことなどを、時にはかなり丁寧に説明したりしながら、共有する時を楽しんでいる。周南周辺の方には勿論、柳井・光・宇部・小野田・美祢などから参加されて、月一回ではあるが楽しみにしている。

ところで、歩いていると日常身辺で異常ではと思うことがある。自分の住んでいる近くの櫛ヶ浜漁港へ至る川で、ボラの身体にあおさのりをべったりとまとったものがいくつも泳いでいた。その抵抗で余り速く泳ぐことができない様が見られた。そのことを土地の人に話すと、いろいろな原因が考えられると、さらに川の石組みにカキが全然ついていない、その川から少し離れた漁港周辺にはカキがついていると言われた。また鉄道線路には草木が生えないように、しっかりと除草剤を撒いていることなどを、熱っぽく漁港近くのお年寄りが語ってくれた。

最近は見た目には海もきれいになってきたように思われる。特に冬場は以前のようにきれいになって来たのかなと甘い点数を付けたくなるが、まだまだ見かけ上のことだけかもしれぬぞと関心を持ち続けている。

昨年は周南市の山間地（金峰）で大変な事件が報道された。亡くなられた方の中に知っている方もおられた。あまりにひどいことだと誰しもが思われたであろうけれど、数年前にその予兆を聞いていただけに、早く手を打てなかったのが残念というか悔やまれる。

その際に、その時は容疑者だった男の身柄が山中で確保されたのとほぼ同時刻に、男が飼っていた犬が心臓発作で突然死んだという。犬は犬なりにくたくたになるまで心労困憊していたのだろう。犬と人間との結びつき、犬自身の特性を知るのに事件が悲惨な事件であったので、再認識させられた。人と人、自然と人との関わりの大事さを考えさせられる事件であった。

表彰受賞者（団体）活動紹介

水・土壌環境保全功労者表彰

錦川流域ネット交流会　白井啓二

このたび、環境省水大気環境局長より水・土壌環境保全功労者表彰を受賞しました。身に余る光栄でございます。錦川流域ネット交流会で、平成二十四年六月に、環境大臣表彰を、翌年の平成二十五年二月には、地域づくり総務大臣表彰を受賞しました。錦川流域のみなさんが、錦川の環境保全や、地域づくりに尽力されたことがこの表彰に繋がったのだと思います。

私の錦川の環境保全のきっかけとなったのは、平成十一年五月に本屋で「結の心」という一冊の本と出会ってからです。一晩で読み終え、あくる日には、その本の著者である、宮崎県綾町の助役三期、町長を六期、町づくりに三十六年務められた、郷田實先生に電話をし、その週の土曜日には郷田先生のご自宅にお伺いし、一晩お酒を飲みながらじっくり話をお聞きしました。

かつて「夜逃げの町」「人の住めない町」と言われた過疎の町を、現在は、綾町を訪れる人は年間百二十万人、「照葉樹林都市」「有機栽培の町」「一戸一品運動の町」、そして、一人ひとりの町民が生活文化を楽しむ町へと変貌。観光客はもとより、村起こし、町起こしの先駆的モデルとして学びに訪れる人も後を断たないそうです。「町づくりとは何か・本物の行政とは何か」行政への寄りかかりを排して、住民一人ひとりの自主・自立の心をよび覚ます「自治公民館運動」の展開によって過疎の貧しさから抜け出し、結の心で町を蘇らせた「郷田町政」二十四年間の話をじっくりお聞きすることが出来ました。それから、何の興味もなかった私の活動が始まったと思います。

郷田先生が「照葉樹林があるから綾川はきれいなんですよ。黄金のアユが泳いでいます。日本一きれいな川ですよ。」と言われたのですが、いつも錦川を見て育った私にとっては、そんなきれいな川ではありませんでした。

「先生お言葉を返すようですが、私たちの町には、錦川という大変きれいな川があります。ぜひ、一度見に来てください。」それからしばらくして、先生が錦町にお越しになられました。「いやはや、きれいな川ですね。これが日本の原風景です。すばらしい」錦ふるさとセンターで町民二百人の前で「町づくり」の講演をしていただきました。あくる日、お帰りになるときに「まちがいなく錦川は日本一きれいな川です。でも、ほっておいたらすぐに汚い川になります。あなたがた、若い人たちが、汗を流し、楽しみながら守っていってください。」そう言い残しお帰りになられました。その一カ月後に、八十一歳でしたが、お亡くなりになられました。あの言葉が遺言だったのかもしれない。当時、商工会青年部長を務めていたので、「錦川清流委員会」を立ち上げ、錦川の河川清掃が始まりました。

その後、錦川の環境保全のグループが結集し「錦川流域ネット交流会」を立ち上げ、流域全体の環境保全が始まりました。郷田實先生と、錦川流域の多くのみなさんのおかげで今回の表彰を受けることができました。本当にありがとうございました。

野生生物保護功労者表彰

日本野鳥の会山口県支部　笹尾克之

平成二五年五月一二日。環境省・（公財）日本鳥類保護連盟・奈良県主催、文部科学省・林野庁後援の第六七回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」が、常陸宮同妃両殿下ご臨席のもと、奈良県橿原文化会館で開催されました。

南川秀樹環境事務官、矢島　稔（公財）日本鳥類保護連盟会長、荒井正吾奈良県知事による主催者あいさつ、来賓、河野洋平百人委員会会長あいさつの後、常陸宮殿下のおことばがありました。

続いて、野生生物保護功労者表彰。

総裁賞（一件）・環境大臣賞（六件）・文部科学大臣奨励賞（二件）・林野庁長官感謝状（三件）・（公財）日本鳥類保護連盟会長賞（三件）・環境省自然環境局長賞（六件）でした。

私は環境省自然環境局長賞で、受賞理由は「平成六年から小学校における自然観察や野鳥保護の指導に尽力。」

「平成一九年から山口県鳥獣保護員として鳥獣保護行政の推進に尽力。」

「平成二二年から山口県野生鳥獣調査団の事務局長として、鳥獣保護区等指定効果測定調査などの活動に貢献するとともに、ガン・カモ類、シギ・チドリ類の一斉調査を実施。」とのことでした。

県内の小学校・緑の少年隊での指導や探鳥会の開催、自然観察指導員としての活動が認められたようです。

表彰式のあと、生駒市立緑ヶ丘中学校の生徒二名による野生生物保護活動発表が行われました。

「自然観察から学んだこと」と題して、学校周辺の野鳥観察を中心にした愛鳥・野生生物の保護活動や河川の水質調査結果などの紹介でした。「プロジェクター」が作動しないというアクシデントの中、落ち着いた発表に感銘を受けました。

つづいて、橿原市少年少女合唱団の「旅の白鳥」「はばたけ鳥」の合唱がステージに華をそえ、会場ロビーの「万葉集に詠まれた鳥」を題材とした、高校生が描いた絵画の数々は圧巻でした。

式典終了後、橿原ロイヤルホテルに場所を移し、常陸宮同妃両殿下もご臨席され、和やかに愛鳥パーティーが開催されました。

この席で前記中学生二人に常陸宮妃からねぎらいのお言葉があり、緊張の中にも清々しい受賞の一日となりました。

今後ともできうる限り指導、調査等を行っていきたいと思っております。

第67回愛鳥週間　「全国野鳥保護のつどい」　野生生物保護功労者表彰受賞記念
平成25年5月12日　橿原ロイヤルホテル

環境学習功労者知事表彰

豊北町自然観察指導員会
伊藤忠雄

昭和二〇年、終戦という日本の大変革期に学生時代を過ごし、政府が「もはや戦後ではない」と宣言した昭和二〇年代の終わり、わたしは中学校理科の教職に就いた。

振り返ると、初任のころに感じた自然観察など課外活動への一貫した思いが、理科で言う第二分野(生物・地学)を選択させ、退職までの自分を支えたと思う。その四〇年間でも、とりわけ角島という稀有な自然のなかで教鞭をとり、地域の人たちとともに環境保全・保護活動が実践できたことは、自分にとってこの上もない幸運であった。

退職後も地元の歴史民俗資料館に勤める傍ら、北浦の自然公園指導員として地域の景勝地・指定地を巡り、「自然と歴史の宝庫」での、活動を続けることができた。

そして平成五年、角島架橋プロジェクトの進行に合わせて、角島地域の自然環境の現状を知り、保護・保全・活用に貢献したい同士と「豊北町自然観察指導員会」の立ち上げとなった。以来実施した自然観察会は一一〇回を超える。「角島の海は青かった 橋が架っても角島であって欲しい」など参加者の言葉が強い力添えとなっている。

いま灯台公園で咲き誇っている水仙も、平成九年、自然観察指導員会が核となり、地元の人たちと一緒に、県道予定地の自生水仙を保護移植したものである。地域づくりから十数年経って人々の思いが立派に花開き話題となってきた。

平成一〇年、こうした活動を励ますように、海からの巨大な贈り物があった。後に新種ツノシマクジラと命名された鯨の漂着である。まるで建設準備中の自然館のシンボルとなることを知っていたかのように現れてくれた宝物である。

平成一二年、角島大橋が開通し青い海の上を走り抜ける爽快感は、建設時と変わらず多くの来訪者を招き続けている。

平成一五年、つのしま自然館開設、ドームにはツノシマクジラ十三mの骨格レプリカが泳いでいる。展示物には写真・標本・種類目録など、手作り資料が採用された。開設に伴い指導員会活動の拠点として情報発信・収集に勤めている。

平成二五年、つのしま自然館が一〇周年を迎え、その式典のなかで成果を総括する機会を得たが通算百回を超える自然観察会の開催と『角島自然観察ガイドⅠ・Ⅱ』を刊行し、あとに続く人たちへのメッセージを、これらの資料に込めたことが最大の成果といえるかもしれない。

最後に、いつまでも白い灯台の映える青い海緑豊かな角島であって欲しいと願いつつ、現職時と退職後の二度、活動の場を与えてもらえた角島とお世話になった多くの方々に心から感謝いたしたい。

環境学習功労者知事表彰

山口県自然観察指導員協議会
黒田義則

山口県自然観察指導員協議会は、昭和六一年（1986年）十一月に発足し「自然観察から始まる自然保護」を合い言葉に、二八年目を迎える自然観察指導員の集まりです。

発足以来、自然観察会・自然環境調査、目的を同じくする他団体との協力・援助・交流、講習会・講演会並びに研修会等の開催、自然環境の保護復元等の自然保護に関する実践活動を目的として活動してきました。

当会が近年行なっている継続的な活動を時系列的に紹介しましょう。

調査活動では、平成一四年～一七年：海岸性植物群落調査を各地で実施。

平成一七年まで：クサフグ産卵定点観察（笠戸島）。

平成一八年から：切戸川水質調査・定点観察。

平成二一年から：セミの抜け殻調査（吉香公園で定点調査）。

平成二五年からは貝殻調査、田んぼの生きもの調査。

平成二六年から：タンポポ調査の予定。

自然保護活動では、

平成一七年まで：ナベヅルのねぐら整備活動。

平成一九年から：カタクリ保全活動及び環境学習会（寂地山）。

平成二〇年から：ヒゼンマユミ保全活動（下関市蓋井島伐竹作業）。

平成二一年から：セツブンソウ保全活動（錦町）。

これらの保護活動は山頂・へき地での倒木整理・伐竹・笹かり等の重労働が多くボランティア活動継続の為には若い会員の育成が急務です。

緑の少年隊自然観察指導員派遣事業では各小学校への指導員派遣、緑の少年隊交歓大会など次代を担う青少年の育成に積極的に参画してきました。

本部・各支部（第1～6支部）を合わせると、各地で観察会・研修会・講習会等を年間三〇回以上行っています。

規約では「自然観察指導員及び本会の目的に賛同するものをもって組織する」と有ります。当会への入会、各種行事への参画を希望する方をお待ちしています。

さて、自然保護に関しては、関わった時間に比例するかのように難しさを実感しています。誤った自然保護も散見される昨今ですが慎重に本質を議論しながら前進して行きたいと思います。また、人間が関わることで保全されていた里山・自然林の崩壊が顕著な現状をどのように改善するかが今後の活動の重要な課題だと思っています。

当会会員皆様方の日常活動の成果が今回の受賞に繋がったものと感謝申し上げます。

日本ユネスコ協会
プロジェクト未来遺産登録

椹野川流域地域通貨・連携促進検討協議会
岡　秀雄

昨年一二月、椹野川の流域連携活動が、第5回プロジェクト未来遺産一〇件の中の一つに選ばれました。

「未来遺産運動」とは、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟が「一〇〇年後の日本に残したい自然がある。伝えたい文化がある」をキャッチフレーズに、自然とともに生きる知恵や工夫の中でつくりあげてきた自然遺産等を未来に伝えていこうという人々の意欲を活性化させることによって時代を切り拓いていくことを目的とし、実施されています。

私たちの団体は、多くの関係者と調整、協議しながら、椹野川流域連携活動の代表として昨年申請に至り、自然分野において、山口県初の登録となりました。

この未来遺産登録に際し、これまでの軌跡を振り返りながら、これからの活動について考えたいと思います。

平成一三年、椹野川最大支流の仁保川の最上流端に、産業廃棄物処理場建設の動きが台頭した際、地元仁保自治会が立ち上がり、「椹野川の源流を守る会」を設立しました。その後、僅か二〇〇日余りで一三〇〇万円を超える浄財を集め、全額を山口市に寄付し、当該土地約5㌶を買収して、これを「四季の森公園」として整備することとなりました。

この整備事業に積極的に参画されたのが「椹野川流域活性化交流会」です。当時の山口漁業協同組合、嘉川漁業協同組合の呼びかけにより平成一二年に発足した当該会は、山口中央森林組合、椹野川漁業協同組合、山口中央農業協同組合、山口市などが参画して流域全域を網羅して、総合的に環境保全活動を展開しておりました。

初めての作業の際、海の男達が、大漁旗をはためかせながら仁保の山奥で植栽作業を行ったことや、連合山口等のボランティアの皆さんがお子さんとご一緒に参加され、山の中に子どもたちの笑い声が響き渡るなど、記憶に残る数多くの取組が生まれました。

これらの継続的なボランティア活動により、一五樹種一七〇〇本余の植樹、下草刈りなどが実施され、四季の森公園は、清流を湛えながら四季折々の魅力をもつ、森・川・海の活動の原点となり、後世に引き継ぐ場所となっております。

椹野川の源流を守る会に賛同し、活動に参加していただいた方に「ありがとう」の気持ちを伝えるには、どうすればよいか・・・活動の輪が広がるにつれ、このような想いがつのってきました。そこで、平成一五年に山口県で策定された「やまぐちの豊かな流域づくり構想（椹野川モデル）」のプロジェクトの一つでもある地域通貨の取り組みを模索し始めました。関係者と協議の結果、組織改編により、当団体を立ち上げると同時に、ボランティア活動の参加者に対し、感謝の印として、地域通貨「フシノ」を交付し、椹野川流域の協力店で、料金の一部として使用できるモデルを作

り、協力店4店舗から、現在までに四〇店舗に拡大し、延べ3万人、八〇〇万フシノを交付しています。

さらに、山口県の伝統工芸品である大内人形を模した椹野川源流の碑の建立、流域マップの作成など、流域の連携を加速してきました。

近年では、県が実施してきた椹野川河口干潟再生活動の一部を引き継ぎ、椹野川河口域に広がる山口湾を、かつての宝の海、里海に再生する活動にも取組を拡大しています。

毎年春に行う干潟耕耘作業には、二〇〇人以上のボランティアが参加し、地元産のアサリ復活に向けて取り組んでおり、平成二一年度には、二〇年ぶりにアサリが漁獲できるようになるなど、一定の成果を上げています。

また、活動前には、椹野川流域で採れた山菜やアユ、アサリ汁などの試食会を開催するなど、参加者が楽しんで活動する工夫もしています。

昨年度からは、トヨタ自動車が活動に協賛してくださり、企業との連携に繋がり、さらには、地元大学から学生の参加が進むなど、地域から、ますますゆるやかなつながりが広がっています。

今回、未来遺産へ登録されたプロジェクト名は「椹野川もり・かわ・うみを再生し人と人をつなぐプロジェクト」。自然の保全も再生も一人の手ではできません。人に呼び掛け、人がつながり、人の手と知恵で自然を守り育てることが大切です。

この未来遺産登録は、既に新たな広がりのきっかけとなりました。早速、企業ボランティアをしたいというお話がありました。

今後も、地域に暮らす人々と企業との連携・大学やNPO・行政との連携など、多様な主体がつながる場づくりと情報発信の場とならなければなりません。ボランティア活動は多くの人に伝えなければ参加していただけません。そのためにも登録は大きな力になります。

私たちにできることは今まで以上に「広く・深く・つながる絆づくり」を提案し、この豊かな椹野川の森・川・海を未来の子どもたちに残すこと、努力することです。

これからも、皆様のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

やまぐち県民活動パワーアップ賞

ふるさと里山救援隊　田中照敏

この度は、第一四回やまぐち県民活動パワーアップ賞を頂きまして大変ありがとうございます。一七年一〇月設立の当法人にとりまして九年目に入ったところでの受賞は、来秋一〇年目を迎えるにあたり大いに励みとなりました。

「共生」への寄稿は二一年一一月七日～八日にかけて開催された第六回リレーミーティングin周防大島での会員団体の紹介に続いて2度目となります。「延命の滝」里山を散策していただいた時の文章を少し抜粋して、現在の活動状況と比較してみたいと思います。

…再生4年目を迎えた二一年夏、初年度に植えた紅葉、桜が目に見えて大きくなり、2年目に植えたブルーベリーが沢山の実をつけるようになって、ようやく将来へ向けて棚田全体像が見えてきました。以下概略を書きます

と…

一年中里山で季節の花が楽しめるように植樹すること。ブルーベリーの収穫祭&延命の滝そうめん流しを米寿にちなんで毎年恒例行事として八月八日に開催すること…

再生した棚田で観光客や住民が一年中楽しめる憩いの場としてさらに地域内外の子供達が里山での環境学習などの場として整備していくことなどを書いておりましたが…。

現在の延命の滝里山には、春の開花を楽しむ「河津桜」「御衣黄」「松月」「兼六園菊桜」「関山」等の桜や「山吹」。花の少ない夏から秋にかけて花を楽しませてくれる「百日紅」。秋、棚田参道沿い各段ごとに香りを楽しませてくれる「金木犀」等を新たに植樹しています。そして、二五年春、延命の滝から流れる小川沿いに「しだれ桜」の植樹をもってほぼ記念植樹は完成しています。

一八年に植樹開始したブルーベリーも一九年、二五年と植樹を重ね現在では約一〇〇本が元気に育っております。延命の滝ブルーベリーは植樹以降「無給水」「無肥料」「無農薬」の三無主義や草や蔓に巻かれながらも生き残ったエリートくんたちです。そして、収穫したブルーベリーは二三年から何れも当法人正会員「瀬戸内ジャムズガーデン」&「大島スイーツ工房ゆーたん」等へジャムやロールケーキの材料として提供しています。さらに二四年からはコラボ企画として製品化「延命の滝ブルーベリージャム」が誕生しています。二五年にはジャム用として、一〇〇kgを収穫。コラボしたジャムは皆様から好評をいただいております。

延命の滝で、長寿・米寿にちなんで毎年八月八日に恒例行事として開催することにした「延命の滝そうめん流し」は二二年から継続開催中で、毎年マイナスイオン溢れる延命の滝から直接竹で水を引いた日本一？

贅沢なそうめん流しです。今年ももちろん八月八日に開催いたします。皆様のお越しをお待ちしております。

再生した延命の滝棚田を使用した交流イベントとしても二二年三月庄地スイドウ・能庄スイドウ・延命の滝棚田を巡る「棚田ツアー」、二五年二月延命の滝「里山・里海ゼミナール」、二五年四月延命の滝「棚田竹灯りの宴」などを実施しており、今春二月には第二回「延命の滝里山・里海ゼミナール」を開催し当夜はキャンプを一部メンバーで実施予定です。このキャンプは後述する「日本一の棚田」再生に向けて三月末の棚田で行うキャンプの事前準備ために計画しています。

延命の滝棚田での今後の活動の展望としては、二三年くらいまでは記念樹を守るために草刈に熱中していましたが、記念樹たちが大きく成長し、春から夏場に一面を覆う草も貴重な肥料だと思い、草をひざ丈より長く伸ばしてから草刈作業をする様になると、延命の滝里山には「ウバユリ」「ナルコユリ」「ホタルブクロ」「オカトラノオ」「シライトソウ」「アザミ」等の群生を楽しめるようになってきました。

そして、大発見は旅するチョウ「アサギマダラ」の吸蜜植物「ヒヨドリバナ」の大群生との嬉しい出会いでした。意識して植物の群生を残していると、二四年九月下旬「ヒヨドリバナ」の白い花が満開を迎えた時、乱舞する「アサギマダラ」と最初の出逢いが訪れました。おそらく、一七年の再生開始以降、ただただ草刈り機やチェーンソーで再生作業をしていた時期から植物や昆虫などとの「共生」へと「里山」での意識がはっきり変わったことを感じています。二五年九月は「ヒヨドリバナ」の大群生に、一〇月には植え付けた「フジバカマ」に「アサギマダラ」の乱舞を見ることが出来るようになっています。これからもおよそ二か月にわたって楽しめる「アサギマダラの里づくり」を続けて参ります。

延命の滝棚田全一六段三〇アールの再生はほぼ見通しがついたので、これからは参道上部約1ヘクタールの森の再生に本腰を入れて行こうと思っています。

参道上部に実生で数百本生えている「山桜」と動物も昆虫（ミツバチ）も人間も食料として「共生」できる「マテバシイ」を中心にした「花とミツバチの森づくり」は、二二年一二月当法人正会員（養蜂業）の笠原隆史さんご夫婦と種蒔きした「マテバシイ」が苗木として育っており、当時奥様のお腹にいたお子様が、小学校に入学予定となる二九年三月の「マテバシイ」の記念植樹をめざして再生を進めて参ります。

最後に延命の滝棚田の再生をステップとして、地元出身の民俗学者・宮本常一が称した「日本一の棚田」の再生（文珠山中腹海抜五〇〇m）＆文珠山林道に続く源流と棚田石垣積みを巡るトレッキングルートづくりをライフワークとして進めて参ります。

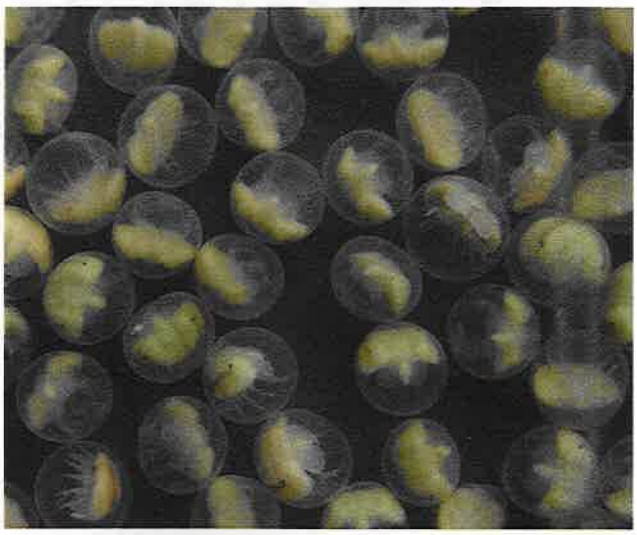
今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

山口きらめき財団理事長表彰

山口カブトガニ研究懇話会　原田直宏

二〇一一年秋、豊田ホタルの里ミュージアムで「下関のカブトガニ」という企画展が催された。いろいろ工夫され、わかりやすい展示であった。標本には私のものも含まれていた。一緒に見に行った妻が「自分でもやってみたら」と軽くそそのかしたのが、きっかけで、その一年後準備を始め、二〇一三年四月にどうにかオープンできたのが「山口カブトガニミニ展示館」である。実家の納屋の一部を改造した小さなものである。寄付していただいた一八〇ｃｍショーケース二本には標本類、一八〇ｃｍの水槽二本には成体を含む卵から飼育してきた大きな個体、ベニヤ板の仕切り板には説明文・図と写真を配置した。また、卵からの小さな幼生たちも泥を敷いた小さなバットに入れ置いている。どうにかカブトガニについておおまかな情報を示すことができていると思う。休館日は設けてなく、家人がいなくても見ていただけるようにしている。幸い新聞、テレビ、ラジオなどで紹介されたこともあり、夏には結構多くの来館者があった。お孫さんと一緒に、帰省を機会に、夏休みの自由研究に、など。昔はいくらでもいて、しっぽをつかんで遊んでいた、と話される年配の方も何人もあった。子供たちは、やはり動いている大きな個体に興味があり、説明や写真はあまり見てもらえないようだった。海に行かなくても、カブトガニについていろいろ関心をもってもらうことができたのではないかと、「展示館」をつくってよかったと思っている。

一九九二年夏に産卵に来たカブトガニのつがいにぶつかってから、つがいの調査や卵の発生の観察、幼生の飼育を始めた。卵は自然産卵されたものを持ち帰り、ふ化するまでの発生のようすを観察した。卵の中で脱皮し大きくなるのは大変興味深い。三回目の脱皮をすると、くるくる後ろ回りをする回転卵となる。もう一回脱皮すると、もう大きくなって動けなくなる。そして膜を破ってふ化し一齢の幼生となる。しかし、中には奇形もおり、海の汚染が原因ではないかと考えさせられた。この年の幼生は、試行錯誤しつつ飼育し、多くが死んでしまったが、成体にまで成長したものもいる。卵から雄になったのは多分日



本では最初である。成体までの脱皮回数が明らかになるとともに、この年の個体には二〇一三年五月まで生きたものがおり、「寿命は？」という質問に一つの答えを提供することになった。幼生の飼育は毎年行ってきており、今では生存率は高い。また九三年からは、海岸に産卵に来るつがい数の調査、干潟の幼生調査も続けてきた。その結果から、千鳥浜の護岸の上に座り、このままでは山口の海からカブトガニがいなくなってしまうのではないかという思いに駆られたことを思い出す。

一九九七年秋に「山口カブトガニ研究懇話会」を立ち上げた。研究の語を使ったのは、大げさだが研究と調査がとても必要だと考えたからである。カブトガニを理解し、現状の把握ができていないと保護活動にはならない。会報「カブ研だより」は、年二回発行し三二号になっている。研究調査や観察会、ホームページによる情報発信などを行ってきた。下関での産卵つがい数の調査や県内三つの繁殖地の幼生調査データは、かなり蓄積されてきた。ただ、現在ホームページから干潟調査の報告を削除している。「日本カブトガニを守る会」総会で、山口のカブトガニがネットで売られているのではないかという話を聞いたからである。もう手遅れかもしれないが。

自然の中のカブトガニを見る観察会は、夏に下関と山口で行っている。それぞれ午前の産卵の観察会と午後の幼生の観察会である。天気が悪く中止したり、潮の都合で産卵の観察会が計画できない年もあった。ある時は五〇名くらいの参加があったこともある。二〇一三年には県立山口博物館の観察会に代えたが、計一〇〇名くらいの参加があった。近くの海にまだ生き残っている、絶滅してはいないこと、不思議な動物であることを実感してもらっていると思う。

二〇一三年一〇月にはきらら公園で行われた「いきいきエコフェア」にブースを出した。展示していた小さな飼育幼生に興味をもった来場者も多かった。また一つ情報発信できたかなと思う。

そう遠くない昔にたくさんいた「生きている化石」カブトガニを、この時代に山口の海からいなくなることがないように、と活動していきたいと思う。

共生随筆

天然記念物「向島小学校の寒桜」

樹木医　中村裕三

平成一〇年に向島小学校から寒桜の様子がおかしいので見て欲しいと依頼を受けました。現状を観察した後に「このまま放置するなら、寒桜は枯れますよ」とキビシイ回答をしました。教頭先生は「どうしたら助かりますか」と哀願されました。「桜の根元が踏圧により固結しています。車が止まった痕跡もあります。まず、寒桜の周囲に柵をしましょう。次に、硬くなった土壌を改良しましょう」。作業は、校長先生と用務員さんにお願いしました。効果はありました。葉が紅葉期でもないのに枯れ、球果が黒くミイラ化する幼果菌核病が、薬剤散布なしで、翌年には症状が軽くなりました。

喜びもつかの間、自然の猛威は容赦なく襲ってきます。平成十一年九月の台風十八号は、山口県に大きな被害をもたらしました。防府市でも電柱が傾き、停電が一週間続きました。幸いにも、寒桜の樹形に被害はありませんでしたが、「四時間位海水に浸かりました」と用務員さんから電話をいただきました。「葉に付いた塩分を水で洗い流して下さい。地中の塩分濃度を薄めるために水道水を流し続けて下さい。」この二点をお願いしました。前年の土壌改良が良かったかどうか分かりませんが、季節外れの開花以外に、異常は認められませんでした。

一難去ってまた一難。幹にキノコの発生を見つけました。木材腐朽菌が侵入すると、子実体としてキノコが現れます。この菌は、樹木を分解して行きます。何十年後に、幹に大きな空洞が出来る可能性があります。残念ながら、この病気を完治する薬剤や処置方法はありません。ただ、樹木も黙ってこの菌の侵入を許している訳ではありません。防御する組織を作ります。ただし、元気な木が条件です。発生箇所によれば弊害になることもありますが、これしかないと思い、牛糞一五〇〇キログラムを二年続けて施肥しました。成功したかどうかは分かりませんが、定期的な経過観察を続ける意外方法はありません。

悲観的な事ばかりでなく、評価を受ける事もありました。平成十三年に防府市天然記念物、平成二十三年には山口県天然記念物に指定されました。また、平成二十三年には日本さくらの会の表彰も受けました。地元でも、この桜の価値は、早くから認知されていました。平成二十年に保存会が設立され、向島小学校の寒桜は蓬莱桜と命名されました。毎年、満開に近い時期に、保存会の運営で蓬莱桜祭りが開催されます。地元の特産品の販売、桜湯の接待等、様々な企画で観桜者をもてなします。一本の桜の木が地域おこしになりました。保存会は、防府市の許可を得て蓬莱桜の維持管理も行っています。消毒、施肥、除草、後継樹の育成、周辺の環境整備が中心ですが、開花時期（一ヶ月）に訪れる三万人の来校者のお世話は、年々多忙を極めています。最初は、地域と共生していました。今では、共存共栄の関係と言えるでしょう。

蓬莱桜に関わって十六年、手をかけすぎて失敗した後は、自然に任せて劣化。試行錯誤の連続でした。ＮＰＯ法人山口県樹木医会の力も借りました。今では、ほんの少しだけお手伝いをさせていただくことを学びました。「この桜を見ると元気になる」。この言葉を何百年も聞くためには、多くの人の支援と愛情が糧となるでしょう。

秋吉台の草原維持

秋吉台の地下水系を調べ守る会　配川武彦

草原も里山も、ちょっと前までは秋吉台と周辺に溢れていた。草原で遊び、里山で柿を食べる。草原も里山も子供たちにとり、最高の遊び場であった。まだテレビのない、家の中に娯楽のない時代のことである。

しかし、昔遊んだ場所はもうどこにもない感じがする。昔の遊びの場は竹藪か杉畑になり、人も入ることができない場所も多い。昔の山には畑があり、柿、栗、梨、何でもある気がした。山にはいたる所に煙が上がり、手伝いもずいぶんさせられた。炭焼き。昔の田舎の生活は誰も同じだった。また、山の畑には柵もなくても被害はなかった。今はいたる所に柵がある。家の傍まで。

遠足はいつも秋吉台で、低学年時代は十南台で、高学年になると黒岩まで登り、長者ヶ森まで遠征して、アベックを初めて見た。

変わったのは町だけでなく、日本中の生活環境が変わったと思う。もちろん、秋吉台も変わった。６０年の長い間、見てきたから当然かもしれないが、変わった。たくさんあった畑は藪になったが、一カ所だけが杉畑になった。いっしか目障りと感じるようになった。山で木を切る作業は薪を作るために昔からさせられた。だから、目障りな杉も自分には切れると思っていた。

秋吉台の自然に強い思いを持つようになったのはやはり、秋芳洞に汚水が流れ出て、その調査を行ったころからである。地下水の重要性を認識し始めた。定年後も流れの中で、４年間は同じような仕事を続けたので、現役時代と少ししか変わらなかった。しかし、２年前に元気な内に自分の思いを完結したいと強く感じて退職。すぐに始めたのが秋吉台の新たな調査、長屋と庭の補修改修、秋吉台の杉畑の木切り。欲張りすぎでかなり無理だったが、押し通した。忙しかった。

在りし日のドリーネ底の杉畑

４０年以上成長した杉は意外と大きなものがあったが、夏場に準備して秋に入り、下草切りを進めた。杉の上まで登りついたカツラの多さに閉口。不安になり、山のプロに見てもらう。無理だった。面積が５反以上で数百本はあると思われた。切りやすい場所から切り始めたが、カツラが巻き付いた木は簡単には倒れないから、連続して切り、まとめて倒した。緊張の連続で、細心の注意をして、考えながら切っていった。慣れるとそれほど難しいとは思わなくなり、意外と早く倒せた。

ドリーネを覆った竹林

杉のない景観に、思いを達成して満足した。しかし、片付けはパークボランティアの皆さんにも協力していただき進めたが、こちらの方が意外と手間で、山焼きと平行して進めている。また、昨年度は新たに竹の伐採を行い、草原復元を目指している。カルストロードから見える大事な場所の保全だが、利用の減少の続く草原の維持の難しさを実感している。山焼きも５０年以上にわたり参加してきたが、年々前に出て、草原が狭くなっている。山焼きまでして草原を維持する行為は外国の人には理解できないのではと考えながら、秋吉台の自然を見つめ解析し、自己満足の追及をしている気がする。

島田川のウラギクの保全活動

ひかりエコメイト代表　藪　博昭

光市に豊かな自然をもたらす島田川の汽水域に生育するウラギクの保全活動について紹介します。

この流域では　最近ウラギクを見かけなくなったとのことでした。一昨年の晩秋、河川敷に繁茂したアシを調査して　河岸に来たところ偶然ウラギクらしい野ギクを発見しました。早速、山口植物学会の南敦会長に連絡し、ウラギクであることを確認していただきました。

キク科の越年草本で、山口県カテゴリー準絶滅危惧種に指定され、最近では護岸工事などにより激減しています。

汽水域で生活をしているので、タンポポと同じような種子は、風で運ばれるため川面を漂い海に流出したり、浚渫や護岸工事により土に活着する確率が低く、繁殖が良くありません。生育地に定着を図るために「レッドデータやまぐち」のウラギク保全の指定事項を遵守して種子を採集しました。

貴重種であることを知り、光市と南会長に相談をして、市と協働主催している「ひかりエコ自然塾」の一講座に加えて「初めて学ぶ光市の希少種植物～知って、観て、守って～」（講師　南会長）を開催しました。

レッドデータブックには希少種植物の生育地は乱獲を防ぐために市町名までしか載せていませんが、それが理由で地域の人たちはその存在を知らず清掃活動の際、他の植物と一緒に刈ってしまうこともあります。

里山や里海の希少種植物を守るには多くの人に知られ、地域の貴重な植物として地域づくりなどに活用され、減れば地域で補充することが重要であることを学びました。

現地での観察後、採集していた種子を参加者全員で生育地に蒔きました。

昨年七月には　大きく育ったウラギクの茎が刈り取られました。環境整備に参加した人は知らずに草刈り機で刈ってしまったのです。幸い脇芽が成長して、十一月には清楚な薄紫色の花を付けました。

今年は、近隣の企業や地域のコミュニティ協議会に働きかけて、協働で保全と育成に取り組みたいと思います。

リレーミーティング in 徳地

平成二五年一一月一〇日の日曜日に、山口市徳地の滑山国有林を会場として、「第一〇回リレーミーティング in 徳地」を開催しました。山口県樹木医会、山口市徳地農林振興事務所の御協力により、初の1日開催で行われました。

当日の天気予報は曇り後晴れ。受付を開始した頃は、多少雨がぱらつくこともありましたが、薄く陽も差しており、これから晴れていくのかなという感じでした。

開会式は、ふれあいパーク大原湖の研修室をお借りして行いました。白井副会長、来賓挨拶に続いて、山口県樹木医会藤原会長から活動内容の紹介、本日の見学箇所の案内がありました。

その後、バスに乗車して滑山国有林へ。この頃から徐々に雨が降り始めました。

まずは、散策も兼ねて毛利藩国有林へ。このモミ巨樹林は、江戸後期ごろ毛利藩により山引苗を植栽して育成されたもので、歴史的、学術的にも価値の高い森林とのことです。しかし、年数が経過することにより、樹木内部の腐朽が進み、空洞化することがあるそうで、今回は最先端の樹幹腐朽精密診断装置（PICUS）を利用した空洞診断を実施していただく予定でしたが、雨の影響により残念ながら機器の説明だけをしていただきました。

その後、同じ場所で昼食。昼食は森林セラピー基地でしか食べられない「癒しの森弁当」です。一緒にお配りしたわさび漬けが好評でお弁当もとてもおいしかったのですが、この頃から雨が激しくなり、傘を差してお弁当を頂く状況に…

次に川を渡って滑山風景林へ。この川を渡る時に木の板で掛けた仮設の端橋を渡ったのですが、なかなかスリリングな体験で、参加した方々も楽しんでおられました。滑山風景林はアカマツ、モミ、ツガ等からなる自然林で、およそ二〇〇年生からなる巨木がある見事な森林でした。普段は川に橋がかかっておらず見ることができないため貴重な体験でした。

その後、徒歩及びバスでふれあいパーク大原湖まで戻り閉会式。結局、終日雨に降られてしまった今回のリレーミーティングですが、参加された方は滑山の貴重な自然を一流の講師の解説で見学することができ、皆さん満足しておられました。

今回の開催に御協力いただいた方々に深く感謝をいたします。次回の開催地はまだ決まっていませんので、御協力いただける団体がいらっしゃいましたら、ご連絡をお待ちしています。